第一次世界大戦戦後処理とUAIの創設

佐　藤　彰　一

はじめに

今からちょうど100年まえ、1922年３月帝国学士院（現日本学士院）が、「わが国と欧州諸国との交通史料交換方を学士院連合会へ提出すべきことを議決」したことを、『日本学士院八〇年史』の年表は記しています。学士院連合会とは現在の国際学士院連合Union Académique Internationale（略称UAI）のことです。その前年1921年のUAI総会で、日本学士院代表三上参次が、「日本と欧州諸国との交通史料」の翻刻出版を内容とするプロジェクトを提案し、それが採択されたとの非公式の連絡を受けて、提案主体である日本学士院側の、正式の意思決定がなされた事実を記録したものと思われます。

UAIの７番目のプロジェクト「日本と欧州諸国との交通史料」は、現在その名称を「在外未刊行日本関係史料」と整え、爾来100年の長きにわたり実質的に東京大学史料編纂所の全面的な支援のお蔭で、着実にその成果を挙げており、常に高い評価を受けているのも、同編纂所のご尽力の賜物とこの場を籍りて感謝を申し上げる次第です。

この度、UAIプロジェクト発足100年を記念し、あわせて長年にわたり同プロジェクトの推進に尽力されてきた保谷徹教授が定年により同編纂所を去るにあたり、本日の会を開催するにあたっての協力を、同編纂所の松方冬子教授から打診され、保谷教授のご功績に日本学士院からの感謝の微意を表する絶好の機会であると思い快諾した次第です。

西洋中世史を専門にする私が、テーマも時代もはなはだかけ離れた主題について、満足のいく話ができるか心もとないところがありますが、暫くおつきあい下さい。

万国学士院連合会（IAA）

今日では国際的な学術交流や研究者の海外派遣、海外からの招聘は当たり前のことにとして行われているわけですが、100年前の第一次世界大戦前後の時期には、航空機による往来は実現しておらず、極東に位置する我が国からヨーロッパに渡るには約40日の船旅、シベリア鉄道経由でも２週間以上の時間を要しました。それにもかかわらず、日本をも含んだ広域的な学術の国際交流は、19世紀の末期ギリギリの時期、すなわち1899年にドイツのヴィースバーデンで「万国学士院連合会International Association of Academies」という形で呱々の声をあげました。これは、それぞれの単語の語頭のアルファベットを取りIAAという略称で呼ばれていますが、後に組織されるUAIとは全く異なる組織です。しかし、この組織の存在と性格が、第一次世界大戦終結間際に動き出したUAIの組織化の胎動と、その性格を規定する因子として重要なので、少し詳しく説明しておく必要があります。

IAAの起源は、かねてから交流を重ねていたヴィーンとミュンヒェンのアカデミー、それにラ

イプツィヒやゲッティンゲン王立アカデミーが毎年連合会を開催して、学術上の諸問題を議論してきたところにありました。これに首都ベルリンのアカデミーが代表を派遣したこともあり、1898年にゲッティンゲンで会合を開催した際に、たまたま英国のロイヤル・ソサエティから、派遣研究者が招かれて出席しました。このような流れの中で、この会合を国際的な組織として編成しようという気運が出席したメンバーの間に醸成され、ヨーロッパ各国のアカデミーに呼びかけて誕生したのがIAAでした。この組織は理系だけでなく、文系の学問も包摂していました。初代会長には、太陽と地球の距離の正確な計算をしたことで有名なドイツの天文学者アルトゥール・アウヴェルスが就任しました。

IAAの第１回大会が1901年にパリで開かれ、その後３年に一度の開催がルールとなり、第２回大会を1904年にロンドンで、第３回を1907年にヴィーンで、第４回を1910年にローマで、最後の第５回が1913年にサンクトペテルブルクでと、開催の規則的なリズムが順調に刻まれました。東京学士会院と称していた当時の日本学士院に加入の打診がなされたのは、1905年のことで、当時の会長はアルプス地質学の研究で名高い、というより太古のゴンドワナ大陸実在の発見者として有名なヴィーン・アカデミーのエドゥアルト・ズュースでした。彼は、このときオーストリアの特命全権公使であった牧野伸顕に打診し、牧野が当時の学士院の会員であった旧知の菊池大麓にその旨を伝えました。その結果我が国の学士院での協議が行われ、加入を決断したというのがIAA参加の簡単な経緯です。ズュースが日本に働きかけた動機は、前年に開始した日露戦争で日本が大国ロシアに勝利したことが大きな要因であったようです。

しかし一方で、日本側でも国際基準での国立アカデミーに模様替えすることを迫られました。この時期文部省や外務省の間で、加入問題に関して遣り取りされた公文書には「帝国学士会」という過渡的、暫定的な名称が見られ、やがてそれは「帝国学士院」という正式名称として固定されていきます。帝国学士院はIAAの第３回ヴィーン大会から代表を派遣しました。それは第１部（文系）の重野安繹会員と第２部（理系）の菊池大麓会員でした。ちなみにローマで1910年に開かれた第４回大会には第２部の桜井錠二会員が単独で、第５回のサンクトペテルブルクで1913年に開かれた大会には、第２部の自然人類学専攻の坪井正五郎会員がやはり単独で出席しました。坪井はこの折に病魔に倒れ、サンクトペテルブルクで客死しています。

ところで、帝国学士院は最初の大会こそ、それぞれ文と理の２名を代表として派遣していますが、その後は第２部、すなわち理系の代表のみの派遣になっています。そこにはIAAが抱えている重要な問題が伏在していたからです。韓国の国際関係史の専門家である李泰鎮（イ・テジン）氏が、UAI創立百周年を記念して出版された小冊子に寄稿した論文で論じていることですが、IAAの初代会長は天文学者でした。それ以後一貫してその専門領域が化学、生理学、地質学、物理学、天文学というように、理系の学者が、会の議論と活動を取りまとめる会長の役を占めているのです。文理両輪がIAA発足当初の活動の原理で、そのことは公式には決して放棄はされなかったのですが、現実には著しく理系に偏った組織運営になっていたのです。そのことは採択された学術プログラムが理系10に対して文系１という比率であったところに如実に示されています。帝国学士院が第４回以降は理系の第２部会員を単独で派遣したのは、わが先人がIAAの体質変化を察知した明察によるものであったのだと思われます。

大戦末期から戦後にかけての英仏アカデミーの動き

IAAの第５回大会が、ロシアのサンクトペテルブルクで開かれた１年後の1914年６月に起った、サラエボでのオーストリア皇太子夫妻の暗殺を直接の契機として勃発した第一次世界大戦により、IAAは活動停止を余儀なくされました。この戦争はアメリカの参戦により、南米と豪州を除く世界のすべての地域が交戦国になったという意味で、最初の世界大戦となったのは皆さんご承知の通りです。IAA参加アカデミーが属する国々も、敵対することになりました。英仏露は連合国となり、独墺伊土は同盟国として対立しました。IAAの発起者であったドイツは、英仏と対立することになります。

この大戦も終局に近づいた1918年初頭にイギリスの王立協会（Royal Society）が提案者となって連合国側の学界を糾合して「万国学術研究会議International Research Council（IRC）」を組織する意向を固め、我が国にもその参加を求めて来ました。当時連合国の側にいた日本の帝国学士院はこれに応えて、第二部の桜井錠二と田中館愛橘の２会員をロンドンに派遣したのです。この新たな組織の規約第１条には、中欧諸国と交戦中の諸国（連合国側）は、現在ある協会から脱退することが求められており、それがIAAを念頭に置いていたのは明らかです。こうして日本も含め、連合国側の各国アカデミーは、IAAから一斉に脱退することを宣言しました。新たに組織されたIRCは、すでに指摘したように、IAAが実質的その性格を強めていた、純粋に理系のみの学術組織でありました。

他方、人文諸科学の分野でも動きがありました。IRCの結成から暫くして、フランスの「碑文・美文アカデミーAcadémie des Inscriptions et Belles-Lettres（AIBL）」が主唱者となって、予備的会議が1918年10月９～11日の３日間にわたってロンドンで開かれ、この会議の報告書に表明されている原則に従って、フランス碑文・美文アカデミーは10月30日の定例会において、「敵国」および中立国を含む海外アカデミーとの関係を議論することにしました。このために作られた委員会の長に任命されたインド学者エミール・スナールと考古学者テオフィル・オモルは、８つの審議会を組織し、ここで３点の問題を議論することにしたのです。第１は「中欧諸帝国（ドイツ、オーストリア・ハプスブルク帝国）」と、どのような学術上の関係を結ぶべきか。第２は、連合国およびそれと提携した各国のアカデミーを糾合した学術組織をフランスに置くことの妥当性如何、第３は学術体制の改革と絡む国際的学術競争の場を、フランス設けるのが適切であるか否かの問題。

審議の結果、第１の問題については、敵国の学者との関係の無期限の中断が決定されました。第２の問いについては、フランスと同盟した諸国のアカデミー間で国際的連合組織を作る方向で活動することが決定されました。ただし、その中心となる事務局の所在は、パリではなくベルギーのブリュッセルに置かれることになりました。第３の問いについては、アカデミーの能力を越える側面があり、議論を将来に持ち越すことで一致しました。

英国学士院と碑文・美文アカデミーの確執

フランスから最初に出された「連合」創設構想の核心にあったのは、英国学士院の参加の実現にありました。AIBLの終身書記で、古代ローマ史と碑文学の専門家であったルネ・カニャは、英国学士院会員で同じローマ史家で旧知の仲であったフランシス・ヘイバーフィルドに、フラン

スの学者が構想している連合国のアカデミー組織に、英国学士院が参加する要請を受けたとき、賛成してくれるか否かを非公式に手紙で打診しました。おそらく好感触を得たのだろうと思いますが、そのうえで当時英国学士院院長であった、古文書学者で聖書学者のサー・フレデリク・ケニオンに「学士院連合」の創設計画を開陳したのです。ケニオン卿はその構想を「非テュートン的学士院連合」と表現したとされています。

この表現には彼の頭の中に、ある意味相互に矛盾する二重の思いが滲んでいるとされます。ひとつはかつての国際学術組織の範型をなすIAAを、ドイツ・オーストリアのドイツ語圏の国々がヘゲモニーを行使した組織であったと認識していたということ、もうひとつはこれと一見矛盾していますが、フランスが「中欧諸帝国」すなわちドイツ、オーストリア・ハンガリー帝国の排除に固執することへの疑問の念です。この後者の点は、後々まで国際学士院連合創設に向けた動きの過程で、フランスが主導権を握ることへの戸惑いとして、彼の中に蟠っていたように思われます。

しかしながら「連合」創設のための各種の非公式の接触が多方面で図られ、フランスの委員会は、最初の大枠となる「考古学、文献学、歴史学研究のための連合国間学士院連合プロジェクト」と題する報告書を、AIBLに提出しました。この報告書は1919年３月14日に同アカデミーの秘密会で満場一致で採択されました。これはフランスの同盟国に直ちに伝えられ、組織構築のための会議を、1919年５月15～17日にパリで開催する旨の返事が、招待状とともに送られました。英国学士院は以前のIAAの庇護のもとに発足した人文系の大型プロジェクトを継続させる国際的学術組織のネットワークを再構築することに関心を示しましたが、フランスが主導権を取ることに激しい異論が出され、かつ「連合国間学士院連合」という存在、すなわちドイツ語圏のアカデミーを排除する含意を孕んだ組織が、果たして永続性を持ちうるかに疑問を呈しました。さらに組織の財政基盤や、ちょうどこの頃アメリカ大統領ウドロー・ウィルソンが提唱した「国際連盟」に代表団を派遣するといった、些か先走った構想をも疑問視しました。

1919年４月２日の英国学士院での白熱した議論が終わった後、院長のケニオン卿はフランスの同僚に、「連合」の在り方全体に疑問を述べ、その懸念を共有してくれるように依頼し、ドイツ人や中立国であった北欧３国やオランダに対して取るべき対応と措置に関して、留意してくれるよう依頼しました。彼は英国学士院が、「連合」に参加する前提として、こうした問題を明確にするのが条件であり、「科学者のヨーロッパ」が、長期にわたり分断されるのは好ましいことではないと強調しています。

1919年５月15～17日に予定通り、予備会議が開かれました。英国学士院も先のケニオン卿の提言にもかかわらず、代表を派遣しています。会議はフランス国立図書館の「ルイ14世の間」で開かれました。出席したのはイギリスのほかアメリカ、ベルギー、イタリア、ギリシア、ルーマニア、日本の代表で、暫定委員会の立ち上げが決定されました。日本の代表は宗教学者姉崎正治でしたが、彼は当時まだ学士院の会員ではなかったので、準代表の資格で出席しました。会議への招待から開催日までの期間に余裕がなかったために、ヨーロッパかアメリカに滞在中の姉崎に、おそらく急遽代理出席を依頼したものと思われます。

この会議で、研究政策を議論し、研究成果の共同出版を目指す学術連合を組織する意向が確認され、これに暫定的に「研究と出版の学士院連合」の名称を冠しました。IAAの多面的、すなわち文と理とを糾合した学術組織の論理と袂と分かち、暫定委員会は連合の研究領域を文献学、歴

史学、精神諸科学、政治・社会科学に限定をしました。先にIRCが理系に特化したことを紹介しましたが、将来のUAIが文系に特化することで、ある意味世界の学術は、均衡の取れた構成になったように思われます。IRCは事務局をベルギーのブリュッセルに置きましたが、UAIもまたブリュッセルに事務局をおくことに決定しました。この措置はUAIがフランス中心の組織であるという印象を薄め、同時にUAIの公用語をフランス語にすることを正当化することにもなりました。公用語の意味合いは、この組織ではフランス語が通信と事務上の言語であり、議場での演説や討論などは必ずしもフランス語によらなくても構わないということでした。

「国際学士院連合」への展開

このようにパリで決定的な進展があったにもかかわらず、英国は懐疑の視線を和らげていませんでした。こうした態度から、多くの国は英国がこの組織に参加しないであろうと踏んでいましたが、一方英国の学者たちは、人文系の学問を組織的に推進する目的の大規模な学者集団の外側で、これに冷ややかに対処するよりも、組織に加入してその中で、この組織を進化させるのに協力するという賢明な判断をしたのです。ただ英国は加入の条件として、プロジェクトの継続性と一貫性の保持を挙げ、さらに英国はドイツの学者を長期的に排除するのは得策ではないとし、また大戦中に中立を貫いた諸国のアカデミーに、特段の要請がなくとも、招待状を出すべきであると主張しました。フランスと同盟を結んだ連合国のアカデミーとしての構築に固執するフランスに、このような異を唱える英国学士院の態度に懸念を感じたAIBLの終身書記で、フランス側の責任者であったテオフィル・オモルは、もって回った表現で、ドイツの学者の参加も事情によってはありうると返事をしたのです。それは結局1925年にスイスで締結されたイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ベルギー、ポーランド、チェコスロバキアの７カ国の相互安全保障条約、いわゆるロカルノ条約により、ドイツのアカデミーの加盟が実現することで果されました。

この外交的勝利に勢いを得た英国は、1919年10月15～18日の次回の会議まで、中立国の参加の条件について交渉するための時間として活用しました。またアメリカの場合、ヨーロッパのアカデミーのような精選された学者のアカデミーとは異なる性格の組織が中心であったために、既存のアカデミーと軋轢が生じないように、新たにAmerican Councl of Learned Society（ACLS）が組織され、これがUAIに加入することになりました。また最初の集会に欠席したアカデミーと、交渉する時間も暫定委員会は与えられました。革命のロシアではサンクトペテルブルクのアカデミーとは連絡が取れなかったものの、英国に亡命中の２人のロシア人学者、すなわち古代ローマ史のミカエル・ロストフツェフと、中世史のポール・ヴィノグラードフを、それぞれ「在外」ロシア・アカデミー代表とペテログラド（旧サンクトペテルブルク）・アカデミーの代表の資格で1919年10月のパリの集会に招くことができました。

また英国の代表団は、少なくとも中立国２カ国（オランダ、デンマーク）の代表が出席するとの確約を得て、パリに赴きました。この機会に会議に代表団を送ったのは11カ国で、アメリカ、イギリス、ベルギー、フランス、デンマーク、ギリシア、オランダ、イタリア、日本、ポーランド、「白ロシア」でした。このロシアからの代表が先に挙げたミカエル・ロストフツェフでした。日本からはインド学、仏教学の高楠順次郎と、政治学の小野塚喜平次の２名が出席しています。イギリスからは英国学士院院長フレデリック・ケニオン卿自身が出席しています。

この会議で、「連合」の正式名称が「国際学士院連合Union Académique Interntionale（UAI）」

とされ、以後、この名称で呼ばれることになります。

小野塚喜平次は、この会議に出席して得た印象を、後に『国家学雑誌』（第34巻第７号）に「万国学士院連合創立巴里会議」と題して寄稿し、その感想として国際間の平等思想はあるものの、ヨーロッパの学者が有利であること、ドイツ、オーストリア排斥思想は表面上露わにならなかったものの、底流には存在していること、討議に際しては熱心に議論するが、また円満に議事を纏めあげる雅量と手腕をもつ学者が多いこと、国際会議におけるフランス語の勢力頗る強大であること、パリ会議に参列したる学者の多数は、現代研究よりはむしろ古代研究を専門にする学者が多数であること、などを挙げています。

この最後の点は小野塚がこの組織が、当初「考古学、文献学、歴史学研究のための連合国間学士院連合プロジェクト」として発足した事実について、必ずしも正確な認識を持っていなかったことを示しています。いずれにしても、帝国学士院は「国際学士院連合」の創設メンバーの一翼を担うことになります。

三頭体制の形成

1920年５月26～28日に、事務局が置かれたベルギーのブリュッセルで第１回国際学士院連合年次総会が開かれました。役員の選挙が行われ、ベルギーの中世史家で、国際的に卓越した評価を受けていたアンリ・ピレンヌが初代会長として選出されました。ピレンヌの名前は我が国で専門家以外にも広く知られています。『中世都市』論は言うに及ばず、ヨーロッパ世界の古代から中世への転換についてイスラーム勢力の勃興と関連づけた『ヨーロッパ世界の誕生』は、有名ですし、なかんずくこの第一次世界大戦中にドイツ軍の捕虜となり、ヴェーザー川沿いのホルツミンデンの捕虜収容所の中で、「ベルギー大学」と称して、ベルギー人捕虜を相手に「ヨーロッパ史」の講義を行い、そこでの着想が後のピレンヌ・テーゼに繋がるという逸話が残る伝説的なオーラに包まれた人物です。

副会長には英国学士院院長サー・フレデリック・ケニオンが選ばれました。これまで紹介したように、彼は終始フランスの碑文・美文アカデミーが独走しようとするのを、優れた判断力で抑制する役割を果たしました。

事務局長にはその碑文・美文アカデミーの終身書記テオフィル・オモルが選ばれました。オモルは優れた考古学者で、フランスの国立研究組織であるアテネ学院の院長を務め、1913年から10年間にわたり、フランス国立図書館館長を兼ねており、とくにアテネのフランス学院院長の折にオランダ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェーなどの中立国の古代研究者との間に培った人間関係は、中立国にフランスが比較的冷淡であったという認識が、尾に引くことがないように配慮を重ねるうえで、非常に有用でした。

こうして、ほぼ理想的な役員人選で、国際学士院連合は発足したのです。日本は第１回大会に中国学者の服部宇之吉と行政法学者の織田萬を代表として派遣し、これ以後第２次世界大戦により、UAIが活動を停止する1940年まで毎年、１人ないし２人の代表を欠かさず総会に派遣しています。

UAI第７プロジェクトに向けて

UAI創設の目的は、人文科学、社会科学分野における国際協力の推進ですが、第一次世界大戦

以前に存在したIAAは、実態はともかく形式上は、文系と理系の両方を含んでいました。UAIは文系のみの組織です。理系はどうなったかと申しますと、既に触れたように英国の王立協会が、大戦末期の1918年に提唱した理系のみの組織であるIRCの準備会議に桜井錠二と田中館愛橘を派遣したのに続いて、翌1919年開催された第一回大会に田中館愛橘を派遣する旨の議決がなされたことは、『日本学士院八十年史』の年表に記載されています。IRCの目標のひとつに、参加国の中に理系分野のそれぞれ個別の学会を組織することが目標とされており、帝国学士院はその機運を先導する役割として、関係官庁に働きかけ、それが軌道に乗ると、どうやらIRCへの帝国学士院そのもののコミットメントを終えたと思われる節があるのです。『日本学士院八十年史』の年表にはそれ以後、UAIへの代表派遣の記事は毎年あるもの、IRCへの派遣記事は見られなくなります。ちなみにIRCは1931年に「International Council of Scientific Union国際学術連合会議（ICSU）」に改組され、1998年に「International Council for Science国際科学会議（ICS）」と名称を変え、2018年には「国際社会科学協議会（ISSC）」と統合し、「International Science Council国際学術会議（ISC）」に改組されました。日本の組織としては日本学術会議が加盟しており、日本学士院は組織として関与していません。実は今から数年前に、この「International Science Council国際学術会議（ISC）」にUAIも加盟するよう打診があり、理事会で議論したことがありました。結論として理系が中心のこの組織への加入は、メリットがないということで、UAIは加盟をしないという決定を行った経緯があります。

話を戻します。UAIの事業の柱は国際的な研究協力で、それは国際的共同プロジェクトの推進にあります。現在まで94のプロジェクトが数えられますが、その第１号は、かつてアテネ学院の研究員で、1920年時点でルーブル博物館の学芸員であったエドモン・ポティエが提案した「Corpus Vasorum Antiquorum古代甕瓶集成（CVA）」です。これは古代ギリシア・ローマの彩色甕のインヴェントリーを悉皆的に作成する事業で、100年を経てもいつ終了するかもまだわからない遠大な企画です。世界の28カ国が加わっており、自らの国の博物館が所有している古代甕瓶を研究して、自らの国で、無論統一のフォーマットに従ってですが、出版する企画で、日本では出光美術館が古代ギリシアの甕瓶を所蔵しており、東京学芸大学教授の水田徹博士により、写真付きで２分冊の調査報告がCVAのシリーズの一環として刊行されています。

帝国学士院では、1921年に第２回UAI総会に日本史学の三上参次会員が法学者の岡松参太郎と共に参加しました。そしてこの機会に現在「在外未刊行日本関係史料（Unpublished Historical Documents Relating to Japan）」と呼ばれるプロジェクトを提案しました。これはUAIの７番目のプロジェクトです。そして翌1922年の第３回総会でその採択が決定しました。この第３回総会に出席したのは井上哲次郎会員と美濃部達吉会員でした。そのプロジェクトは東京大学史料編纂所に実質の作業をお願いしています。そのことにあらためて感謝したいと思います。

こうした経緯について、ルノー・バルデとケネス・バートラムズはその共同執筆の論文の中で、次のように評価しています。「日本は、根本的にヨーロッパ諸国によって構成される学術ネットワークの中にすぐさま錨を下ろす好機をとらえた。この展開は日本の学者を国際舞台に強く押し出すだけでなく、国民史の構築が学術的に公認される梃子の役割を果たした」と評価しています。それ以前の６つのプロジェクトが、いずれも古代ギリシアやローマ文明に関するプロジェクトあるいはグロティウス研究など、ヨーロッパ的「普遍性」を体現する性格のプロジェクトであったのに対して、日本が提案した自国史の史料編纂は、ヨーロッパの人文学の伝統とは異質の学術的

展望を人文科学の分野に切り拓いたことへの賛辞であったと思われます。

ご清聴ありがとうございました。

参照文献

『日本学士院八十年史』日本学士院，大久保利謙・犬丸秀雄編．1962年.

Frederick R. Dickinson, *War and National Reinvention. Japan in the Great War, 1914-1919,* Harvard University Press, Cambridge (Mass.) / London, 1999.

Renaud Bardez / Kenneth Bertrams, "L'Union Académique Internationale, un laboratoire de la diplomatie scientifique de l'entre-deux-guerres", in (éd. par, Jean-Luc De Paepe / Pierre Jodogne / Isabelle Algrain), *D'une république des savants à une communauté de chercheurs. Regards sur l'histoire de l'Union Académique Internationale (UAI), 1919-2019*, Brepols, 2019, pp. 25-41.

Tae-Jin YI, "La creation de l'UAI dans le cadre du mouvement pour la paix mondiale: de Wiesbaden, 1899 à Paris, 1919", *ibid.* 43-66.

Sarah Keymeulen / Jo Tollebeek, *Henri Pirenne, Historien. A Life in Pictures,* Lipsius, Leuven, 2011.